



# 『菜根譚』

## —性善説の処世哲学—

文  
写真 吉田公平  
文学部教授



### 隠れたロングセラー 『菜根譚』

皆さんは「菜根譚」（さいこんたん）という書をどこまでご覧になったことがありますか。中国の明代末期（万暦八年）に洪自誠（こうじしやう）という士大夫読書人によって著された心学の箴言集です。特に明治時代以降の日本では隠れたロングセラーで、中国の古典の中では、「論語」と並んで広く読まれ、今日でも、社会人の間では根強い人気があります。しかしそれほど広く読まれながらも、専門の研究者の間では特に取り上げて研究されたことはありません。

ここ百年の間にたくさん訳注・解説書が出版され、その都度読者から歓迎されましたが、訳解者は鎌倉建長寺の釈宋演とか東急の五島慶太、警世家の加藤拙道など、しよせん専門家ではありませんでした。中国語学者の魚返善雄（うがへぜん）が、大胆に現代語訳したのは戦後のこと。その後、中国思想史の専門家が訳解に参加するようになりました。そのおかげで事実の考証がゆきとどき、当時の口語（白話）の語彙語法をふまえた現代語訳がなされるようになりました。漢文式読解にもたれかかった「講話もの」に比べると、格段の進歩といえます。しかしその場合でも、陽明学の影響下に隆盛をみた明代末期の心学運動の中で著されたことが、十分に理解されていませんでした。

### 『菜根譚』の わかりやすい現代語訳

講談社版「中国の古典」の一冊であった「伝習録」が、たちばな出版の「たちばな教養文庫」に入ることになった際に、談たまたま「菜根譚」に及び、話の勢いで引き受けることになり、同じく「たちばな教養文庫」の一冊として去年の八月に刊行されました。

「菜根譚」をあくまで心学の箴言集として扱うことがねらいの一つでしたが、もう一つのねらいは、現代語訳にありました。中国の古典は長いこと「漢文書き下し」が主流でした。もちろん翻訳文がつくことが多いのですが、解釈解れば原文の漢字によりかかった文意の不明晰な翻訳文に、学生時代以来、随分と悩まされてきました。漢文・中国古典を専門としない一般の読者が、その内容を一読して理解できる、そういう現代語訳を機会があればしてみたいと思っていましたので、渡りに舟と引き受けたわけです。箴言集の翻訳が容易でないことを痛感しました。私の試みがどの程度達成できたのか、自己評価よりも読者の評価をお聞きしたいところです。

### 心学の普及書として

「我々は本来完全なのだ」というのが心学の基本的人間観です。その儒教的表現が性善説です。本来完全なものとして先天的に固有

する倫理能力を発揮して、悪の世界から自由になり、本来の自己を自力で実現する、というのが性善説の骨子です。性善説にこだわらずに、自力による自己実現をいう禅学も心学に入ります。元氣（根本的氣）生のエネルギーに充たされている本来の自己を気功や薬餌養生で自己実現を図る道教も心学です。心学は、教学の枠にとらわれないことなく、すでにあるものは食欲に利用して、自己実現・自己開発をもくろむ、柔軟にして強靱な構造なのです。

儒・仏・道三教は各々独自の心学哲学を述べて自派の優越性を自己主張しますが、形而上学的論拠をあらさままに述べることを差し控えた、処世哲学ともいえるべき箴言集となると、そこでは三教は渾然一体となり、心学の特色がいかなく発揮されます。こむずかしい哲学はさておいた箴言集なればこそ、根強く支持されたのだと思います。

これまで研究者が「菜根譚」を取り上げなかったのも、深奥な哲学がことさらに述べられていないからでした。しかし、考えてみると、「論語」や「老子」も箴言集に過ぎないのを後世の学者が哲学的解釈を付け加えただけです。心学の普及書ともいえるべき「菜根譚」は、三教に通底する人生観・処世観をみるのに格好の素材なのです。

### 人生の教養書となる

### 『菜根譚』

「菜根譚」は、戦前には臣民の修養の書として広く読まれましたが、戦後もなお市民の教養の書として静かに読まれています。政治や経済の仕組みが変わり生活の風景が異なっても、一人の人間として身を世に処して人間らしく生きていこうとするときに、身に降りかかる艱難辛苦や喜怒哀楽に類似のものがあるからでしょうか。

開巻第一条の冒頭は「真理を守る者は、寂しくともその時のみ。権勢にへつらう者は、永遠にいたましい」。なんの変哲もない言葉ですが、政治情勢の厳しい中国を思い、我が身の出入進退を重ねて、臨場感をもって読むと、なかなか滋味の深いものがあります。生きることの難しさと欲びを味わせてくれる心学の教養書です。

（よした・こうへい）

- ◆一九四二年宮城県生まれ
- ◆一九七〇年東北大学大学院博士課程後期中途退学
- ◆一九八七年文学博士（広島大学）
- ◆学位論文「陸象山と王陽明」（研文出版）
- ◆所属 文学部中国哲学・近世思想史講座

